

ここ最近、悲觀的になったニュースをあげるなら、コロナウィルスの発生源とその国を特定するようなニュースが多かったことでした。アメリカ、ヨーロッパでは、コロナウィルスが中国が発生源なので、アジア系の人たちへのハイトクライムがふえているというのです。またおなじヨーロッパの中でもドイツのフランス国境に近いところでフランス人が卵を投げつけられるなどのハイトクライムの被害に遭うという事件が起きています。ハイトクライムは日本の国内にもあります、さいたま市の事例ですが

「国に帰れ」「厚かましい」「日本人と同じ権利と保護があると思ってるのか」――。ここ連日、電話やメールでハイトスピーチをぶつけられているのは、埼玉朝鮮初中級学校幼稚部（園児41人・さいたま市）だ。…3月上旬、さいたま市はウィルス感染防止策として市内の幼稚園や保育園、放課後児童クラブに備蓄マスクを配布することを決めた。ところが、市は「直接に指導監督する施設ではない」ことを理由に、朝鮮学校を配布対象としなかった。しかも、理由を訊ねた同園・朴洋子園長に対し、市の担当者は配布マスクが転売される可能性をも示唆したのである。これが新聞に報じられて、さいたま市への抗議が寄せられるようになり、市は配布をするようになったのですが、そうすると今度は「外国人に税金を使うな」とかいこう抗議が出てくるという始末です。まったく悲しむべきことです。ところでニューヨーク市長のビル・デブラシオさんは、ここの声明を発しました、「差別やハイトクライムをみたらすぐに通報してほしい。アジア系のみなき

ん、ニューヨークはあなた方の味方です」とメッセージを発しました。ここでハイトクライムの問題を簡単に論ずることはできませんが、少なくとも民族や国などの帰属意識と密接に関係していることは明らかです。

今日の聖書箇所ではどうもキリストを信じる者たちが、迫害を被る、現代でいうところのハイトクライムの被害者のようです。「あなたがたは世に属していない。わたしがある方を世から選び出した。だから世はあなた方を憎むのである」と、キリストを信仰する者たちは世に属していないから憎まれるというのです。もともと世に帰属していたひとたちが、イエスによって世から選り出されたのです。その信仰者たちも、多数の人たちから迫害されたならば、だれでもこう思ったのではないでしょうか。「わたしは間違っているかもしれない」と。迫害者は、信仰者が自ら信じるキリストを放棄することを目的としているのです。イエスに従う弟子たちは信仰の危機に直面しているのです。

話題を変えますが、皮肉なことですがコロナウィルス感染症の影響で、朝のNHKドラマを見ることのできるようになりました。エールというドラマを初回からほとんど連続して見ることができています。あのドラマの時代背景は、大正デモクラシーです。主人公の古山裕一（窪田正孝）は現在の作曲家古関裕而をモデルにしているとのこと。彼は'09年生まれで'89年まで生きた方です。いわゆる大正デモクラシーと呼ばれる時代が'05年から'31年といわれますが、まさに、その申し子といってもよいでしょう。ドラマでは時代が自由に向かって突き進む世相の中で、裕一や音（二階堂ふみ）が苦悩しながらも自由を実現する姿の対局には古くからの家族制度の

なかで、生きるひとたちが描かれています。福島の実家で必死に生きる裕一の弟、浩二（佐久本宝）の苦悶する姿がよく描かれているなあと感心するので。わたしはこの弟浩二のその後が心配でなりません。かれが古い家族制度のなかで自分の自由を放棄して屈折しなければ、一生兄裕一への妬みと羨望にとられて生きていくことになるのではないかと心配でならないのです。

さらに、ドラマの展開とは離れますが、このドラマの時代背景である大正デモクラシーも末期になると'23年に関東大震災が起こりました。このときには数多くの在日朝鮮人がデマに煽られて虐殺されたという痛ましい事件がありました。つまり自由な時代を謳歌した後、経済が失速する、低迷がおとずれると時を同じく他民族への迫害などが起こるということ。'25年には治安維持法がつくられて言論や思想が抑え込まれていく、自由が極端に制限されていくのです。これは同時代のドイツのユダヤ人迫害、そして、ずっと時代を遡り、ローマ帝国の末期のユダヤ教やキリスト教への迫害についてもざっとみるとおなじようなことがいえるのです。

その歴史の繰り返しの中に、名を残すこともなかったほとんどすべてのひとたちのひとりの人生にも何かかけがえのない意味を歴史に刻んだ、そんな人生があったのかもしれないのです。そのひとつが今日の聖書箇所の背景なのです。

ヨハネ聖書の時代に生きた信仰者たちに起こった出来事、彼らが世に憎まれた、それはなにゆえだったのでしょうか？彼らの生き方は否定されて当然だったのでしょうか？彼らの生き方はひとを欺くようなものだったのだろうか、彼らは自分だけの利己的な生き方を目指したの

でしょうか…？

確かなことは、彼らは当時のユダヤ社会の多数者とは異なる信仰を生きる支えとしたのでした。それはイエスは救い主、神から遣わされた救い主であると信じていることでした。世から受ける憎しみをたどっていくとそこに行き着くのです。

しかし、なぜいわれなき憎しみを受けたのでしょうか？それは何よりも救い主であると信じているイエス自らが世から憎しみを受けたからでした。その憎しみを受ける問題は何だったのか？

18 「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。19 あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。20 『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。21 しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするよつになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。それでは、イエスが受けた憎しみがなんであるか、ヨハネは詩編69・5によって説き明かしています。

理由もなくわたしを憎む者は／この頭の髪よりも数多く／いわれなくわたしに敵意を抱く者／滅ぼそうとする者は力を増して行きます。わたしは自分が奪わなかったものすら／償わねばなりません。憎しみ・迫害を受ける者に何か落ち度があるのではな

い、憎む者たち自身に問題があるのです。

わたしたちは助け合う、支え合って豊かな社会を築くことができればよいのですが、残念ながら性暴力、家庭内暴力、民族の差別、あるいは最近では教育機関における暴力なども報道されています。これらに共通していることは、被害者が、自らを責める、その反面、加害者に問題があることがないがしろにされることが見過ごされやすいということです。

そこでの加害者に共通する問題とは、いったいどのようなものなのでしょうか？「自由からの逃走」という本の中でユダヤ系のフロムという（社会心理）学者さんは、ファシズムの心理について書き表しています。生まれは1900年ですから、朝ドラ「エール」とほぼ同年代です。彼はドイツに生まれたユダヤ人でしたからナチズムによる迫害から逃れてスイス、'34年にはアメリカに亡命するのです。彼自身の生涯も自由ということ絶えず意識せざるを得ないものでした。

フロムはこの「自由からの逃走」のなかで、ファシズムの根底にある加害者（サディスト）の攻撃性や被害者（マゾヒスト）が暴力を受容する根底には、自由とか独立を放棄するという共通点がみられるということです。例えばとしてヒトラーによる「わが闘争」の一部を紹介します。「新しい運動の帰依者になろうとすると、個人は孤立的な感じがして、自分はひとりではないかという恐怖にとらわれがちであるが、かれは、大衆集会で初めてより大きな同士（仲間）の集まりをみて、たいていの人を力づけ勇気づけるものを受け取るのである。」この孤独への恐れが、わたしたちを「自由からの逃走」へと駆り立てるのです。ましてやいわれのない憎しみや迫害を受けるときには、なおさらのこと、ひとは自由を放棄する＝逃走

するかもしれないのです。

22わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。23わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。24だれも行ったことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たらうで、わたしとわたしの父を憎んでいる。25しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

3月29日以来、会堂礼拝を休んでいます、わたしたちのなかには、ひとりで祈りを献げている人が多くいます。病院で、施設でひとりで言葉にならない祈りを献げているひとがいます。動画、原稿から文字をとおして使信を受け取る限界を感じているでしょう。わたし自身が限界を感じています。もしも信仰の危機を感じているひとがあるなら、イエスもまたそれを遙かに上回る危機にさらされ、迫害を受けたことを思いお越しませう。

そして孤独のなかにあつても神のもとから「助け手（弁護者）」として「真理の霊」がわたしたちのもとに降り来て、主イエスが神から遣わされたことの意味を説き明かしてくれること、聖霊降臨を待ち望みましょう。

26わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。27あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。



